〝南洋性〟と〝中国性〟とが混淆する架空の町の物語

藤井 省三

南洋とは南シナ海に広がる南方地域であり、この地域には二〇〇〇万人を超す華人が住んでいる。この南洋にあってマレーシアとシンガポールは、かつてイギリス植民地支配を受けながら中国における近代文学誕生とほぼ歩みを同じくして北京語文学の歴史を刻んでおり、郁達夫ら中国からの「南下文化人」も多く迎えてきた。両国が一九五〇年代から六〇年代にかけて独立したのちも中国語教育は続いており、新加坡（シンガポール）と馬来西亜（マレーシア）で栄える「新馬」華語文学については、荒井茂夫「南洋の北京語文学と日本人の南洋体験」（『岩波講座「帝国」日本の学知　第5巻　東アジアの文学・言語空間』収録）に詳しい。

ちなみにマレーシアの面積は約三三万平方キロメートルで日本の約〇・九倍、二〇〇九年現在の人口二八三一万人のうち中国系は約二六パーセント七〇〇万人で、残りはマレー系六六パーセント、インド系約八パーセントという（http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html）。

このような南洋マレーシアの青年華人が、五〇年代末より台湾の大学や大学院に留学、やがて文学活動を開始して、今日では「台湾馬華文学」という独自のジャンルを形成するに至るのである。昨年一一月より翻訳刊行が始まった「台湾熱帯文学」シリーズは、この異色の中国語文学を全四冊で紹介する極めて意欲的な試みであり、本書はその第一巻なのである。

「台湾熱帯文学」シリーズの編集委員会は、日台マレーシア三地出身の四名から構成されており、本書の巻頭言「刊行に寄せて」で、「台湾熱帯文学」の特色を南洋性（Nanyangness）と中国性（Chineseness）とにまとめ、次のように指摘している。

彼らは、生活圏を台湾に定め、台湾に定住・長期滞在しながらも、その作品の基調は依然として南洋（東南アジア）世界にある。南洋の故郷に対する思いや、熱帯雨林を背景とする生活や歴史が幻想的なイメージ――南洋性を醸成する一方、台湾での生活をとおして南洋華人であるがゆえに感受する矛盾や衝突、憂いや悲しみと向き合い、

李永平著／池上貞子・及川茜訳
吉陵鎮ものがたり（台湾熱帯文学1）
四六判　308頁
人文書院［2940円］

故郷と異郷の二つの極で揺れる「華裔」の人生が表現される。そこには華人（中国人）として中国性に憧憬を抱きながらも、中国性（台湾の祖国性）には溶解されえない南洋という故郷を志向する独自の精神性が表現されている。

そのいっぽうで編集委員の一人である黄英哲は、本書巻末の「解説」で、作者李永平の経歴を、一九四七年マレーシア・ボルネオ島生れで、高校卒業後台湾に渡り、六七年台湾大学外国語文学系に入学、白先勇、陳若曦とともに雑誌『現代文学』を創刊、卒業後アメリカに留学し博士号取得後に帰台し中山大学外国語文学系などで教壇に立った、と紹介した後、本作について次のように記している。

『吉陵鎮ものがたり（吉陵春秋）』は、李永平が原郷を別の次元で語ったものだとみなすことができる。彼はかつて、「吉陵」はひとつの象徴であり、「春秋」とは人の褒貶の寓話であると語ったことがある（……）。この象徴と寓話に満ちたオムニバス小説で、作者は出身地ボルネオから離れて、吉陵という名の架空の閉鎖的な町、すべてが強烈に中国的なものを象徴する町を描いてみせた。

第一話「万福巷にて」は、幼時にコレラで家族を失い、万福巷の棺桶屋劉ばあさんの養女となり、六、七年後に劉ばあさんの息子劉老実の嫁となった清純な長笙が、六月一九日観音誕生日の祭礼と昼酒とで興奮したやくざ者の孫四房にレイプされて自殺したため、夫の劉老実が発狂して孫四房の馴染みの娼婦と妻を殺害するまでを描く。第二話以下は、長笙の亡霊や劉老実の影に怯えて生きるその後の孫四房配下の四人の元チンピラや、万福巷の娼婦らをめぐる物語で、白衣・空門・天荒・花雨の各巻三話、全十二話の因縁物語が一〇年の歳月をかけて展開し、長編小説として実を結んでいる。その中で万福巷での観音祭は繰り返し描かれ、物語の発端であるレイプ事件も、次のような狂乱の最中に突発したのだった。

郁老道士がとつぜん、エイッと臍か

中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 4月号

人民中国雑誌社　定価400円（税込）
［年間購読料4800円（税込）］

【特集・若芽が巨木に―はたちになった中国資本市場】中国資本市場20年の発展変遷◆株券は「神様たち」から一億三千万人の投資家に【連載】革命史跡を訪ねる②江西・井岡山―人民解放軍揺籃の地◆チャイナ・パワーを読み解くPartⅡ④新たな日中経済・ビジネス関係の構築に向けて◆中国伝統の技⑦貴州省黔東南ミャオ族トン族自治州・蘆笙の音色は母のささやき◆アートで他者と関わる子どもたち◆中国青年の「感知日本」の旅ほか

『人民中国』は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の情報を満載。見本誌贈呈。
☎03（3937）0300（東方書店）
二〇一〇年一月号より『人民中国』デジタル版をFujisan.co.jpで販売しています。サンプル版の試し読み（無料）もできます。
http://www.fujisan.co.jp/magazine/1385

ら七星剣を抜きとった。血がほとばしり、目の前にいた二人の担ぎ手の汗だくの肩を真っ赤に染めた。見ているうちに、道士の干からびた小さな体が痙攣し、向きを変えてバタリと神輿の入り口に倒れかかった。ぶるぶると体を震わせている。満庭芳の前にいた二人の若い娼婦がふいに軒下から抜けだした。止める主人の手を振りはらい、気でも狂ったかのように裸足で路地の真ん中に立った。あっけにとられた春紅は、涙をぬぐい、手の中の火のついた長い線香を置くと、何も言わずにスカートの裾をめくりあげた。たちまち五、六人の町内の女が路地の真ん中に飛びだして、石畳の道の上に腹ばいになった。先頭の八人の担ぎ手は重々しい声で「どっこいしょ」と言うと、腰を曲げ、白衣観音を担いで、ひと足ひと足娼婦たちの上を踏んでいった。軒下で神迎えを見物していた人たちは、先ほどから血走った目を見ひらき、声をからして、快哉を叫んでいる。爆竹に次々と火が点じられ、火花が飛び、路地の真ん中から四方へ散っていった（三九頁）。

黄英哲解説によれば、本作は「ある強姦事件を中心に展開し……さまざまな背徳やその後に降りかかった恐ろしい」物語であり、その舞台となる人口五〇〇〇の小さな町、中心部の繁華な妓楼街万福巷と唐辛子作りの周縁の村から成り立つ吉陵鎮――私にはアメリカ作家フォークナーのヨクナパトーファや、現代中国作家莫言の東北郷を連想させる――には、作者李永平が他作で描いた故郷「南洋の風情」は「まったく存在」しないという。確かに男たちは夏の真っ昼間から大汗かいて薬酒の五加皮を飲み、女たちは暖を取るため炭火を掻き立てている。

そのいっぽうで、「頭に白い布を巻いた教徒たち」が「教団の乱」を起こして吉陵鎮を襲うなど、イスラム教徒と漢族との衝突を示唆するエピソードが語られれば、マレーシアを連想させられること

法政大学出版局
http://www.h-up.com/

張玉萍（チョウギョクヘイ）著
戴季陶と近代日本
▼A5判・上製／362頁／定価5460円

日本での留学経験を経て、ジャーナリスト、のちに中国国民党の有力政治家となり、孫文の通訳も含めて幾度も来日した戴季陶。近代中国第一の知日家が見た日本の姿とは――戴の苦悩と政治思想の変遷を考察する

表示価格は消費5%込です
〒102-0073 千代田区九段北3-2-7
TEL 5214-5540 FAX 5214-5542

であろう。第七話「蛇の呪い」には「一尺ばかりの草蛇」から「茶碗の口ほどの太さの亀裂花」という大蛇までが登場し、「南洋の風情」を掻き立ててもいる。本作が描く吉陵鎮とは、南洋性と中国性とが混淆する物語世界であり、私たちのアイデンティティを激しく揺るがすのである。

この混淆する物語世界の語り方自体も不定である。第一話は「見たことのある人は、みんなその女のことをきれいだと言う。だが、その時は誰もわからなかったが、そういう清純な美しさは一種の呪いにも変わりうる。長笙が嫁いだ時は、やっと十六歳だった。」（一三頁）と三人称の叙述だが、「女がなぜあの棺桶屋の劉老実に嫁いだのか、誰も知らなかったらしい。何年もたってからようやく耳にしたのは、こういうことだ。」（同）と感情移入して語る語り手は、吉陵鎮の人に違いなかろう。やがて巻三天荒の第一篇である第七話「蛇の呪い」は、「寒くなると手持ち無沙汰だな。おい靳老五、炭火をおこそうぜ。高粱酒を開けて、蛇の話をしてやるよ。」（一五九頁）と一人称の叙述となる。その語り手とは、第九話「荒城の夜」の主人公克三であり、聞き手の靳老五は学生で、克三の寄宿舎仲間であることもこの第九話で明らかになるのだ。そして「蛇の呪い」では娼家のおかみ羅四の養女で一四歳の秋棠も脇役として登場するが、村の可憐な少女だった彼女が前年にやくざ者に誘拐される経緯は第八話「降りしきる春雨」で語られる――それも次のような意識の流れの手法によって。

「行かないわ」

「やっちまうぞ！」

秋棠が顔を上げて外を見ると、雨は確かに弱まっていた。どこを見てもうら寂しい景色だ。緑に萌え雨にけぶる水田の向こうには、三つ辻の井戸から望むと、山のふもとの彼女の家で赤い瓦屋根の上にかまどの煙がのぼっているのが見えた。秋棠は肝が冷えるのを感じた。母さんは戸口に手をかけ、首を突きだして帰りを待っていることだろう。遠く山すそに風が起こり、村の入口の緑に茂る柳林から、ザワザワと増水した河のような音が運ばれてきた。（二〇五頁）

本作は吉陵鎮という架空の町を舞台に、さまざまな人々の人生を突き動かしていく情念と論理と運命とを語っているようだ。それにしても、レイプされ自殺した長笙とレイプ犯孫四房の内面は、いっさい語られない。亡霊としてやくざ者として共に恐れられる両者は、混沌とした万福巷の聖と俗との象徴なのであろうか。

（ふじい・しょうぞう　東京大学）

■中国語話者のための日本語教育研究会
第18回研究会
▼3月26日㈯12時半～（12時受付開始）▼一橋大学（東京都国立市中2-1）東キャンパス東1号館1304▼申込不要・参加費無料【プログラムより】「中国語を母語とする日本語学習者が選択する動詞の格助詞」岡田美穂（九州大学大学院）ほか▼16時35分～17時総会（終了後懇親会あり）▼お問合せ：事務局（庵功雄 isaoiori@courante.plala.or.jp）